

【第1部】基礎編

Q1. 答え：断定の助動詞「なり」

解説：体言「花」＋「なり」。「これは花である」。

Q2. 答え：伝聞・推定の助動詞「なり」連体形「なる」（伝聞）

解説：サ変「す」終止形＋伝聞・推定「なり」連体形「なる」＋体言「日記」。終止形に付いているので伝聞・推定で、人から聞いて知っていることなので伝聞。「男も書くという日記というものを、女（の私）も書いてみようと思って書くのである」。文末の「するなり」は、サ変「す」連体形「する」＋断定「なり」。終止形「す」か連体形「する」かで見分ける。（『土佐日記』冒頭）

Q3. 答え：ナリ活用形容動詞「静かなり」終止形

解説：語幹「静か」＋「なり」。

Q4. 答え：伝聞・推定の助動詞「なり」

解説：四段「響く」は終止形と連体形が同じ形なので、形だけでは決まらない。鐘の音を聞いて推し量っているので推定。「鐘の音が響いているようだ」。

Q5. 答え：断定「なり」

解説：体言「春」＋「なり」。「春である」。

Q6. 答え：ナリ活用形容動詞「あはれなり」

解説：語幹「あはれ」＋「なり」。

Q7. 答え：伝聞・推定「なり」

解説：四段「鳴く」は終止形と連体形が同じ形なので、形だけでは決まらない。鳥の鳴き声（音）を聞いて推し量っているので推定。「鳥が鳴いているようだ（鳴き声が聞こえる）」。

Q8. 答え：断定「なり」

解説：体言「者」＋「なり」。「私は、都から下ってきた者である」。

Q9. 答え：伝聞・推定「なり」

解説：「聞こゆ」終止＋「なり」。聴覚で推定。

Q10. 答え：断定「なり」連用形

解説：体言「風」＋「なり」連用＋「けり」。「風であった」。

Q11. 答え：断定「なり」

解説：体言「夜」＋「なり」。

Q12. 答え：ナリ活用形容動詞「のどかなり」

解説：語幹「のどか」＋活用語尾「なり」。「のどか」だけでは主語にならず、上に「いと」がつくので形容動詞。「春の日は、たいそうのどかだ」。

Q13. 答え：ナリ活用形容動詞「平らかなり」

解説：語幹「平らか」＋活用語尾「なり」。「海の面は、やはり穏やかだ」。

Q14. 答え：伝聞・推定「なり」

解説：四段「詠む」は終止形と連体形が同じ形なので、形だけでは決まらない。「聞けば」とあり、人から聞いた話なので伝聞。「聞くところでは、隣の老人も歌を詠むそうだ」。

Q15. 答え：伝聞・推定「なり」

解説：四段「さへづる」は終止形と連体形が同じ形なので、形だけでは決まらない。鶯の声（音）を聞いて推し量っているので推定。「鶯がさえずっているようだ」。

Q16. 答え：断定「なり」

解説：体言「琴」＋「なり」。「これは、母の形見の琴である」。

Q17. 答え：伝聞・推定「なり」

解説：下二段「出づ」終止形＋伝聞・推定「なり」。連体形なら「出づる」となり、それに付く「なり」は断定（Q32）。明日の予定を人から聞いた話なので伝聞。「明日、あの人は京を出発するそうだ」。

Q18. 答え：伝聞・推定「なり」

解説：ナ変「往ぬ」終止形＋伝聞・推定「なり」。連体形なら「往ぬる」となる（「往ぬるなり」なら断定）。「往ぬ」は一語の動詞（Q90「行きぬなり」の「ぬ」は完了の助動詞）。杳の音が遠ざかるのを聞いて推し量っているので推定。「杳の音が遠ざかって、客人は帰っていくようだ」。

Q19. 答え：断定「なり」

解説：体言「都鳥」＋「なり」。

Q20. 答え：四段動詞「成る」連用形「なり」

解説：「春」＋格助詞「に」＋動詞「成る」連用「なり」＋完了「ぬ」。「春になった」。

【第2部】標準編

Q21. 答え：断定「なり」

解説：体言「人」＋「なり」。

Q22. 答え：伝聞・推定「なり」

解説：四段「笑ふ」は終止形と連体形が同じ形なので、形だけでは決まらない。几帳（布を垂らした仕切り）の向こうの笑い声を聞いて推し量っているので推定。「几帳の中で、女房たちが笑っているようだ」。

Q23. 答え：伝聞・推定「なり」

解説：尊敬の補助動詞「給ふ」（四段）は終止形と連体形が同じ形なので、形だけでは決まらない。お車（牛車）の音を聞いて推し量っているので推定。「お車の音がして、大納言殿がお出かけになるようだ」。

Q24. 答え：ナリ活用形容動詞「はるかなり」

解説：語幹「はるか」＋活用語尾「なり」。「はるか」だけでは主語にならず、「いとはるかなり」と上に「いと」がつくので形容動詞。「都は、まだはるかに遠い」。

Q25. 答え：断定「なり」連用形「に」

解説：体言「人」＋断定「なり」連用形「に」＋係助詞「こそ」＋ラ変「あり」＋過去「けり」已然形「けれ」（こそこの結び）。「心ある人だったのだ」。「なり」が連用形「に」になっている点に注意。

Q26. 答え：伝聞・推定「なり」

解説：四段「降る」は終止形と連体形が同じ形なので、形だけでは決まらない。軒の雫の音を聞いて推し量っているので推定。「軒の雫の音がして、春雨が降っているようだ」。

Q27. 答え：断定「なり」連用形

解説：体言「人」＋断定「なり」連用形＋過去「けり」已然形「けれ」＋接続助詞「ば」（原因・理由）。「和歌の道にすぐれた人だったので、人々はみな敬った」。

Q28. 答え：伝聞・推定「なり」

解説：下二段「吠ゆ」終止形＋伝聞・推定「なり」。連体形なら「吠ゆる」となる。夜ふけに遠くの声を受けて推し量っているので推定。「夜がふけて、遠くで犬がほえているようだ」。

Q29. 答え：断定「なり」

解説：体言「主」＋「なり」。

Q30. 答え：伝聞・推定「なり」

解説：打消「ず」連体形「ざる」の撥音便「ざん」の「ん」を書かない形＋伝聞・推定「なり」（ざるなり→ざんなり→ざなり）。打消「ず」に伝聞・推定の「なり」が付くときは、ラ変型の連体形「ざる」に付き、ふつうこの「ざ（ん）なり」の形になる。嵐の音を聞いて推し量っているので推定。「嵐の音が、まだ止まないようだ」。

Q31. 答え：ナリ活用形容動詞「あらたなり」

解説：語幹「あらた」＋「なり」。

Q32. 答え：断定「なり」

解説：下二段「出づ」連体形「出づる」＋断定「なり」。連体形に直接接続するのは断定（伝聞推定「なり」は終止形接続が原則）。「月が出るのである／出ているのだ」。

Q33. 答え：伝聞・推定「なり」

解説：上二段「落つ」終止形＋伝聞・推定「なり」。連体形なら「落つる」となる。暗くて見えないが、音を聞いて推し量っているので推定。「暗くて見えないけれど、滝が落ちているようだ（音がする）」。

Q34. 答え：断定「なり」連用形

解説：体言「弟子」＋「なり」連用＋「けり」。

Q35. 答え：断定「なり」

解説：体言「人」＋「なり」。

Q36. 答え：断定「なり」

解説：体言「音」＋「なり」。「（それは）風が吹く音である」。

Q37. 答え：断定「なり」連用形

解説：体言「人」＋「なり」連用＋「けり」。

Q38. 答え：伝聞・推定「なり」已然形「なれ」

解説：サ変「す」終止形＋伝聞・推定「なり」已然形「なれ」＋接続助詞「ど」（逆接）。話し声を聞いて推し量っているので推定。「人の話し声がするようだが、姿は見えない」。

Q39. 答え：断定「なり」（最後の「なり」）

解説：体言「御方」＋「なり」。先頭の「あはれなる」は形容動詞連体形。

Q40. 答え：伝聞・推定「なり」

解説：四段「吹く」は終止形と連体形が同じ形なので、形だけでは決まらない。松の梢が鳴る音を聞いて推し量っているので推定。「松の梢を鳴らして、春の風が吹いているようだ」。

Q41. 答え：断定「なり」

解説：形容詞「難し」連体形「難き」＋断定「なり」。連体形＋なりは断定。「人の心を知ることは、やはり難しいのだ」。

Q42. 答え：断定「なり」

解説：体言「人」＋「なり」。

Q43. 答え：断定「なり」連用形

解説：体言「心」＋「なり」連用＋「けり」。

Q44. 答え：伝聞・推定「なり」

解説：四段「帰る」は終止形と連体形が同じ形なので、形だけでは決まらない。続く「櫓の音聞こゆ」から、音を聞いて推し量っているとわかるので推定。「海にいる船が、今帰ってくるようだ。櫓の音が聞こえる」。はじめの「海なる」は、場所＋断定「なり」連体形で「海にある」（存在）の意味。

Q45. 答え：断定「なり」

解説：形容詞「深し」連体形「深き」＋断定「なり」。「この池は、たいそう深いのだ」。

Q46. 答え：断定「なり」連用形

解説：体言「人」＋「なり」連用＋過去「き」連体「し」＋「が」(接続助詞)。「心ある人だったが」。

Q47. 答え：伝聞・推定「なり」

解説：四段「摘む」は終止形と連体形が同じ形なので、形だけでは決まらない。人の話を聞いて知ったことなので伝聞。「人が言うのを聞くと、春日野では、もう若菜を摘んでいるそうだ」。

Q48. 答え：断定「なり」連用形

解説：体言「大臣」＋「なり」連用＋「けり」。

Q49. 答え：断定「なり」

解説：ラ変「あり」連体形「ある」＋断定「なり」。ラ変型には断定も伝聞・推定も連体形に付くが、伝聞・推定ならふつう撥音便で「あんなり」「あなり」の形になる (Q73)。「ある」と書き切っており、「～であるのだ」と言い切っているので断定。「にて」は断定「なり」連用形「に」＋接続助詞「て」。「名高い都鳥であるのだ」。

Q50. 答え：伝聞・推定「なり」連体形「なる」

解説：尊敬の補助動詞「給ふ」(四段)＋伝聞・推定「なり」連体形「なる」＋体言「声」。お経を読む声を聞いて推し量っているので推定(断定の「なる」と取ると「～である声」となり、意味が通らない)。「御堂の中でお経をお読みになっているらしい声が、たいそう尊い」。

【第3部】応用編

Q51. 答え：断定「なり」連用形

解説：「人」＋「なり」連用＋「けり」。

Q52. 答え：断定「なり」

解説：形容詞「激し」連体形「激しき」＋断定「なり」。「風の音は、まだ激しいのだ」。

Q53. 答え：形容動詞「明らかなり」連用形＋過去「けり」

解説：語幹「明らか」＋「なり」連用＋「けり」。

Q54. 答え：断定「なり」

解説：形容詞「寒し」連体形「寒き」＋断定「なり」。「山里の冬は、とりわけ寒いのだ」。

Q55. 答え：断定「なり」

解説：カ変「来」連体形「来る」＋断定「なり」。「春が来るのだ」。(伝聞・推定にするなら終止形「来(く)」を用いて「来(く)なり」とする。)

Q56. 答え：形容動詞「あはれなり」連用形＋過去「けり」

解説：語幹「あはれ」＋活用語尾「なり」(連用形)＋過去「けり」終止形。上に「いと」がつくので形容動詞。はじめの「にて」は断定「なり」連用形「に」＋接続助詞「て」。「心ある人で、たいそうしみじみと心ひかれる人であった」。

Q57. 答え：四段動詞「鳴る」連体形「なる」(「ぞ」の結び)

解説：主語「入相の鐘」の述語で、「鳴る」と訳せるので動詞。上は係助詞「ぞ」で、断定(体言・連体形に付く)や伝聞・推定(終止形に付く)の形に当たらないので、助動詞の「なり」ではない。係助詞「ぞ」の結びで連体形。「夕暮れを告げる寺の鐘が鳴る」。

Q58. 答え：断定「なり」

解説：打消「ず」連体形「ざる」＋断定「なり」。「ざる」はラ変型の活用なので、断定も伝聞・推定も連体形に付くが、伝聞・推定ならふつう撥音便で「ざんなり」「ざなり」の形になる (Q30)。「ざる」と書き切っており、「来ないのは～からだ」と理由を言い切っている所以で断定。「あの人が来ないのは、道を知らないからなのだ」。

Q59. 答え：断定「なり」連用形

解説：体言「人」＋「なり」連用＋「けり」。

Q60. 答え：伝聞・推定「なり」

解説：完了「つ」終止＋「なり」。「雨が止んだという」。

Q61. 答え：断定「なり」

解説：体言「人」＋「なり」。

Q62. 答え：伝聞・推定「なり」

解説：四段「うつ」は終止形と連体形が同じ形なので、形だけでは決まらない。夜ふけに、砧（きぬた）で衣を打つ音が聞こえてくるのを詠んだ歌なので、音による推定。「吉野の山の秋風が吹き、夜がふけて、昔の都のあった吉野の里は寒々として、衣を打つ音が聞こえてくる」。（『新古今和歌集』・藤原雅経。百人一首にもとられる）

Q63. 答え：形容動詞「静かなり」連用形＋過去「ける」

解説：語幹「静か」＋「なり」連用＋「ける」連体＋体言「夜」。

Q64. 答え：断定「なり」

解説：形容詞連体「賑はしき」＋「なり」。

Q65. 答え：断定「なり」連体形「なる」

解説：体言「人」＋断定「なり」連体形「なる」＋接続助詞「を」（逆接「～のに」）。「世を背く」は出家すること。「まだ若い人であるのに、もう出家してしまった」。

Q66. 答え：四段動詞「成る」終止形

解説：「多く」（形容詞連用）＋動詞「成る」終止形「なる」。文末で係り結びもないため終止形。「多くなる」。

Q67. 答え：断定「なり」連体形「なる」

解説：体言「人」＋「なる」＋助動詞「べし」。

Q68. 答え：形容動詞「さやかなり」連体形「なる」

解説：語幹「さやか」＋「なる」＋体言「夕暮れ」。

Q69. 答え：断定「なり」連用形「なり」

解説：四段「生く」已然形「生け」＋存続「り」連体形「る」＋断定「なり」連用形＋過去「けり」終止形。「古い友は、まだ生きていたのだ」。連体形「生ける」＋なりで断定。

Q70. 答え：四段動詞「成る」連用形

解説：形容動詞「静かなり」連用形「静かに」＋動詞「成る」連用形「なり」＋完了「ぬ」已然形「ぬれ」＋接続助詞「ば」。「静かになる」のように「～になる」と訳せるので動詞（形容動詞「静かなり」の語尾の「なり」と見まちがえないこと）。「夜がふけて、あたりが静かになったので、人々はみな寝入ってしまった」。

Q71. 答え：断定「なり」連体形

解説：体言「人」＋断定「なり」連体形「なる」（「～であること」）＋係助詞「ぞ」＋形容詞「よし」連体形「よき」（「ぞ」の結び）。「心ある人であるのがよい」。

Q72. 答え：断定「なり」連用形

解説：体言「人」＋「なり」連用＋「けり」終止＋引用「と」。

Q73. 答え：伝聞・推定「なり」

解説：ラ変「あり」連体形「ある」の撥音便「あん」の「ん」を書かない形＋伝聞・推定「なり」（あるなり→あんなり→あなり）。撥音便＋「なり」は伝聞・推定の目印。人から聞いた話なので伝聞。「この山の奥に、古い寺があるそうだ」。

Q74. 答え：断定「なり」未然形「なら」

解説：体言「人」＋断定「なり」未然形「なら」＋打消「ず」終止形。「この男は、物のあわれを知る人ではない」。

Q75. 答え：形容動詞「明らかなり」未然形「なら」

解説：語幹「明らか」＋「なら」＋「む」（推量）。

Q76. 答え：断定「なり」連体形

解説：体言「人」＋「なる」＋「らむ」（推量）。

Q77. 答え：伝聞・推定「なり」

解説：下二段「おとづる」（音を立てる）終止形＋伝聞・推定「なり」。連体形なら「おとづるる」となる。荻の葉が風に鳴る音を聞いて推し量っているので推定。「荻の葉に、秋風が音を立てて吹いているようだ」。

Q78. 答え：断定「なり」連用形

解説：形容詞「心細し」連体形「心細き」＋断定「なり」連用形＋詠嘆「けり」。「本当に、旅の空（旅先）は心細いものであったのだなあ」。

Q79. 答え：断定「なり」連体形

解説：体言「人」＋断定「なり」連体形「なる」＋格助詞「を」（「～であることを」）。「月の都の人であることを、世間の人は知らない」。

Q80. 答え：断定「なり」已然形「なれ」

解説：体言「童」＋断定「なり」已然形「なれ」＋接続助詞「ば」（原因・理由）。「まだ幼い子どもなので、文字も知らない」。

【第4部】入試レベル

Q81. 答え：断定「なり」已然形「なれ」

解説：「くもで（蜘蛛手）」は、蜘蛛の足のように川の流れる川が四方に分かれていること。体言「くもで」＋断定「なり」已然形「なれ」＋接続助詞「ば」（原因・理由）。「そこを八橋といったのは、水の流れる川が蜘蛛の足のようになっているので、橋を八つ渡してあることによって、八橋といったのだった」。（『伊勢物語』第九段）

Q82. 答え：伝聞・推定「なり」

解説：サ変「す」終止形＋伝聞・推定「なり」。「出で来る」はカ変の連体形で、下の体言「音」にかかっている（「なり」のすぐ上の語ではない）。御簾の中の音を聞いて推し量っているので推定。「御簾の中から人が出てくる音がするようだ」。

Q83. 答え：断定「なり」已然形「なれ」（「こそ」の結び）

解説：体言「もの」＋断定「なり」已然形「なれ」。係助詞「こそ」の結びなので已然形。「人の心こそ、移り変わりやすいものである」。

Q84. 答え：断定「なり」

解説：体言「人」＋「なり」。「たり」は完了「たり」の連用形、「ける」は過去「けり」の連体形。「中国に渡った人である」。

Q85. 答え：ナリ活用形容動詞「明らかなり」連体形「なる」

解説：語幹「明らか」＋活用語尾「なる」。下の体言「夜」を修飾する連体形。あとの「夜なれ」は、体言「夜」＋断定「なり」已然形で別物。「月が明るい夜なので、人々は外に出て（管弦の）遊びをする」。

Q86. 答え：断定「なり」已然形「なれ」

解説：体言「者」＋断定「なり」已然形「なれ」＋接続助詞「ど」（逆接）。「身分は低い者であるけれど、気立てはたいそうすばらしい」。

Q87. 答え：断定「なり」連用形

解説：体言「錦」＋断定「なり」連用形＋詠嘆「けり」連体形「ける」（係助詞「ぞ」の結び）。「見渡すと、柳の緑と桜の花の色をまぜ合わせて、都こそが春の錦であったのだなあ」。（『古今和歌集』・素性法師）

Q88. 答え：四段動詞「成る」連用形

解説：「多く」（形容詞連用）＋「成る」連用「なり」＋完了「ぬ」。「多くなった」。

Q89. 答え：伝聞・推定「なり」

解説：サ変「おはす」終止形＋伝聞・推定「なり」。連体形なら「おはする」となる。終止形に付いているので伝聞・推定。「帝は、御殿の中にいらっしゃるそうだ」。

Q90. 答え：伝聞・推定「なり」

解説：完了「ぬ」終止形＋伝聞・推定「なり」。「行き」は四段の連用形なので、この「ぬ」は完了（打消なら「行かぬ」）。完了「ぬ」の連体形なら「ぬる」となる。笛の音が遠ざかるのを聞いて推し量っているので推定。「笛を吹く人が、門の前を通り過ぎて行ってしまったようだ」。

Q91. 答え：断定「なり」連用形

解説：体言「御娘」＋断定「なり」連用形＋過去「けり」終止形＋引用「と」。「と聞く」と人から聞いた話でも、「なり」のすぐ上が体言なので断定。「あの琴を弾く人は、亡くなった大納言の娘であったと聞く」。

Q92. 答え：伝聞・推定「なり」連体形「なる」（伝聞）

解説：カ変「まうで来」の終止形「まうで来（く）」＋伝聞・推定「なり」連体形「なる」（係助詞「なむ」の結び）。カ変は終止形「来（く）」と連体形「来る」の形がちがうので、形で決まる。かぐや姫から聞いたことを翁が帝の使いに伝えているので伝聞。「この十五日に、月の都からかぐや姫の迎えに（人々が）参上するそうです」。（『竹取物語』）

Q93. 答え：断定「なり」連用形

解説：体言「人」＋断定「なり」連用形＋過去「き」連体形「し」＋接続助詞「を」（逆接）。「昔は歌を上手に詠む人だったのに、今はすっかり忘れてしまった」。

Q94. 答え：断定「なり」未然形「なら」

解説：体言「人」＋「なら」＋「ば」（仮定）。

Q95. 答え：断定「なり」

解説：形容詞「悲し」連体形「悲しき」＋断定「なり」。声（音）の文でも、すぐ上が形容詞の連体形なので断定。「夜中に鳴く鹿の声は、たいそう悲しいのだ」。

Q96. 答え：断定「なり」連用形

解説：体言「人ら」＋「なり」連用＋「けり」。

Q97. 答え：断定「なり」連用形

解説：体言「夜」＋「なり」連用＋「けり」。

Q98. 答え：断定「なり」連体形「なる」

解説：体言「音」＋断定「なり」連体形「なる」＋推量「べし」。「音」の文でも、すぐ上が体言なので断定。「これは、あの姫君がお弾きになる琴の音であるにちがいない」。

Q99. 答え：四段動詞「成る」未然形「なら」

解説：「秋」＋格助詞「に」＋動詞「成る」未然形「なら」＋接続助詞「ば」（仮定）。「～になる」と訳せるので動詞。「来む」はカ変「来（こ）」未然形＋意志「む」。「秋になったら、また来よう」。

Q100. 答え：断定「なり」連用形「に」

解説：体言「水」＋断定「なり」連用形「に」＋ラ変「あり」未然形「あら」＋打消「ず」。「にあらず」で「～ではない」。「流れていく川の流れるは絶えることがなくて、しかも、もとの水ではない」。あとの「世の中にある人」の「に」は場所を表す格助詞（「世の中である人」とは訳せない）。（『方丈記』冒頭）